

車

鈴木京子

自動車の運転免許などまったく興味はなかった。一生、自分が車を運転することはないと思っていた。

私が育った頃は茨城の実家にも車はなく、家族は大人も子どもも、自分の足と自転車どこへでも行った。母が幼稚園の「ママさんバレーボール」の試合中にアキレス腱を切った時も、父が自転車で迎えに行き、後ろの荷台に母を乗せ自転車を押して連れ帰った。母は翌日から自転車を杖代わりに自力で接骨院へ治療に通った。

夜の星座観測会や台風で早引けになった時など、小学校まで保護者が迎えに来たが、やっぱり母は自転車 came。雨の時は黒い合羽を着て、私の黄色い合羽を持って。小さいうちは喜んで後ろに乗っていたのに、三年生くらいからだろうか、友だちの目が気になって、なぜか恥ずかしくて、自転車は押して二人で歩いて帰るようになった。母はいつも「乗ったらヨカッペヨ、重くネエから」

と言ったが、私は、三十キロ近い負荷をかけてこぐ母を気づかしたわけではなく、そんな母の自転車を水しぶきをあげて次々と追い越していく自動車の中の、友だちの目を気にしていた。母が必死でこぐほど惨めで、歩くほうがカッコ悪くなかった。

就職を前に友人たちが教習所通いをしているときも、就職して自活するようになってからも、車がほしいと思ったことはなかった。東京で暮らす限り、一生、不要だった。

ここに移住してくる時も、実家での経験から自転車で間に合うだろうと思っていた。六月に越してきて、七月、八月と快調に自転車を乗り回し、雨の日だって「母のように」合羽を着て刺し子教室に通った。

でも、九月に入り、出し風（陸から海へ吹く風、ここでは東からの風）が強くなると、それまで十分で行けた場所に三十分をかけても着けなくなった。坂道でもないのにこぐことができず、自転車は荷車代わりに押して歩いた。

十月になると、寒くて、晴れていても顔が痛くて、雨の日は家にひきこもった。やがて路面が凍り、雪が降り出し、積雪は三月まで続くことに気づき、絶望して、「運転免許を持たない人生」を断念した。移住から半年後の十二月二十六日、普通免許の交付を受けた。

七年間で中古の軽ワゴンを二台乗り継ぎ、三台めは思い切って新車の軽トラックにした。ちょうど節分に納車されたので「節子」と名付けた。軽トラックってすごいヨ、まるで自転車！ どんな



節子大根 無事に漬物工場に到着。二車線国道もがんばって走りました。



節子田植え 5月30日の鳥海山のおつぺんと節子。今年もゲンさんの田んぼへソネ洗いにきました。



反省 ソネ洗いの最終日、エイジさんちの入り口でこんなことになってしまい、深く反省。



ソネ洗い エイジさんちへ3日間通って3700枚のソネを洗った。



救出 お世話になっているクルマ屋さんがすぐ駆けつけてくれて、エイジさんちのリフトを使って救出。家主のいないうちに解決。45分間の事件でした。

ところへもクルクルとよく走る。
節子さん、五月は大活躍でした。田んぼから田んぼへと十日間も田植えして歩き、砂丘のメロン畑へも四輪駆動で駆け上り、泥んこになりながら畑で大根を積み込むと二車線の国道を疾走して漬物工場へ運びました。